令和４年３月号

ノア Smile

春日部セントノア病院

〒344-0001
埼玉県春日部市不動院野１１１２-1
TEL048-760-1200
FAX048-760-1201
https://www.saintnoah-kasukabe.jp

～目次～

●病院短信　瓦井　洋
●日常の一コマ　松井　朋恵
●いきいき看護・介護　伊藤　美紀
●相談室だより　江原　佳世子
●大根収穫祭　農園にて
●スタッフ紹介　立川　まみ

３月の予定

◇誕生日会
１病棟　３月　４日（金）
２病棟　３月　１日（火）
３病棟　３月１１日（金）
各病棟デイルーム　１４：００～

ダイコン収穫祭

冬晴れのとある日に大根を収穫してきました。

天気が良いから
気分最高！

収穫した大根は煮大根にして
多くのみなさんで美味しくいただきました。

※2 月予定の豆まき・誕生日会は都合により中止となりました。

スタッフ紹介

１病棟　介護士
立川（たちかわ）　まみ
血液型　Ａ型
趣味　音楽鑑賞

入職してあっという間に半年が経ちました。認知症専門病院は初めてで、スタッフの皆さんから日々いろいろな事を学び教えて頂いています。これからも患者さんの笑顔をたくさん見られるよう頑張ります。

病院短信

『オミクロン株』との戦い

事務局長　瓦井　洋

コロナウイルス『オミクロン株』の感染力の強さは今更言うまでもありませんが、当院でも2月に入ってからその凄まじい感染力の洗礼を受けました。当院はご承知のように老人性認知症の専門病院です。入院患者168名が全て高齢者の上に、殆どの患者さんが他の病気（既往症）も抱えています。そんな患者さんたちの中に強力な感染力を持つ「オミクロンウイルス」が入ってきたら…。考えただけでも鳥肌が立ってしまうのに、それが現実になってしまいました。

2年前、私が「新型コロナ感染症」の危機管理を引き受けた時、まず考えたのがこの病院の患者さんの「特性」でした。その「特性」は後述しますが、その前にこのウイルスは、飛沫であれ、エアロゾルであれ、接触であれ、「人から人」に感染し、その感染力はとても強力だという「特徴」があります。そしてこの「特性」や「特徴」を知れば知るほどこのウイルスは、絶対に院内に持ち込んではならないと気が付きます。感染させないこと、これが一番なのです。ここの患者さんたちの生活は入院生活が全てです。院内は自由ですが門外に出ることは出来ません。そんな患者さんたちに感染の可能性があるとすれば、常に接触がある看護師や介護士、そして医師を含めたメディカルスタッフたちです。だとすればウイルスを院内に持ち込まない方策の第一として、外から出入りする職員たちスタッフの水際作戦を厳重にすることを最優先にすべきです。そして第二の水際作戦として、誠に不本意なのですが、面会を制限させて頂き、薬品や医療物品などの納入業者さんなども最小限にし、決められた場所以外での受け渡しはしないとしました。その上で、この病院に勤務するスタッフ全員に、院内外での予防として、『飛沫感染・エアロゾル感染・接触感染』をしないように一つ一つの予防法も含めてレクチャー（通達）をしました。さらに、全スタッフには次のような約束事をお願いしました。

まず、朝の出勤前に体温測定をしてもらい『37.5度以上の熱があるか？・頭痛や咽頭痛はあるか？・倦怠感があるか？』の3つをチェックしてもらい、もしあった場合には『出勤』はせずに、自宅から必ず『所属長に電話』連絡を入れること。そして指示された近隣の『医療機関でPCR検査を受ける』か、又は『来院して抗原検査を受ける』か、のどちらかを選択することを徹底させました。そしてどちらの検査においても『陰性でない限り、出勤は許可しないシステム』にしたのです。

さて、前述したこの病院の患者さんの『特性』ですが、とにかくこの病院の患者さんは、病棟では全く自由奔放に行動します（病院の方針で患者さんへの拘束は一切しませんから）。さらに患者さんは殆どが、マスクをしてくれません。そして機嫌が悪ければ、クスリもまともに飲んでくれません。つまりコロナウイルスに対しては『全くの無防備』なのです。ですから新型コロナの感染が始まってからのこの2年間、全スタッフは「ウイルス」だけは絶対に院内には入れない、という強い思いで出勤前の『システム』をきちんと守りながら頑張ってきました。この作戦は第5波までは成功しました。川越、春日部、両病院の患者さんにひとりも感染者は出ませんでした。

そして今年の1月。デルタ株から変異した『オミクロン株』の感染が急速に増え始め、埼玉の病院や施設でもクラスターが出始めました。我々も早く3回目の接種をしたいのでヤキモキしていたのですが、結局全スタッフに接種を完了出来たのが1月28日でした。そして患者さんたちの接種はワクチンの到着が間に合わず2月7日からの予定でした。ところが何という事でしょうか！全職員の接種完了をせせら笑うように1月30日、2病棟と3病棟の患者さんからクラスターが発生したのです。そしてさらにその翌日、2病棟、3病棟に勤務する看護師・介護士からもクラスターが発生。私はすぐに2つの病棟を隔離閉鎖しましたが時すでに遅く、1病棟からも感染者が広がっていったのです。だいぶ文章が長くなりましたので、その結果と結論を言います。

患者さんの陽性者は最初に感染者が出てから3週間の間に、全病棟（168床）で陽性者は70人、実に41％の患者さんが感染したことになります。そして職員の感染者は、全職員（126名）のうち22名、17％のスタッフが陽性となってしまったのです。このため、3つの病棟（各56床）を隔離病棟として閉鎖。その病棟に勤務する看護師及び介護士以外は全て出入り禁止としました。この感染騒ぎは約3週間続きましたが、2月の21日以降、患者さんにも職員にも新規感染者はおらず、患者さんたちにも重症者はひとりも出ませんでした。

ところで、『ハイブリッド免疫（スーパー抗体）』というのをご存知ですか？米国のペンシルベニア大学やワシントン大学の研究チームが出した査読前の論文ですが、『陽性者がさらにワクチン接種をした時の免疫は、2回ワクチン接種では得られない桁外れに高いレベルの免疫を得ている』というものです。偶然ですが、当院は陽性となった患者さんに、落ち着いた時点で3回目のワクチン接種をしましたので、この『ハイブリッド免疫』に密かに期待して、月末の28日をもって全病棟の閉鎖を解き、院内に出していた緊急事態宣言も解除しました。

1病棟　看護師　伊藤　美紀

「夏バテ」は聞いたことがあるけれど「春バテ」についてはよく知らないという方も多いのではないでしょうか。春バテとは、その名の通り、春に起こりやすい心身の不調のこと。春は1年の中でも寒暖差が大きい時期であり、生活環境や人間関係に変化が起こりやすい時期でもあります。こうした寒暖差や環境の変化が原因となり、以下のような症状が現れることがあるのです。

・なんだかだるい
・やる気が出ない
・集中できない
・イライラする
・ちょっとしたことで落ち込む

このような症状に心当たりがある場合には、春バテになっているかもしれません。心身ともに健康な状態で過ごすためにも、春バテにならないようくつかのポイントを押さえておくことが大切です。

1、冷え対策に取り組む
2、バランスの良い食事を意識する
3、質の良い睡眠をとる

心身に不調をきたす「春バテ」を予防するための3つのポイントを意識することが、春バテ予防につながります。今回ご紹介した情報も参考に、心身ともに健やかな状態で春を過ごしましょう。

日常の一コマ

今月の一コマは３病棟の芳江さん（８６歳）です。

芳江さんはさいたま市に生まれ、２５歳の時にご結婚。２男１女に恵まれたそうです。昭和４９年にご主人が開設された幼稚園に勤め、ご主人が亡くなられたあとは経営を引き継ぎ、６０代の後半まで頑張ってこられたそうです。また幼稚園経営の余暇では書道の腕も一流で、当院の作業療法（書道の他に切り絵、みんなで唄うカラオケ、サツマイモや枝豆を収穫する畑仕事等々）でも見事な腕を披露しています。それもそのはずで、国際書道展で準特選になったほどだそうです。

７０歳になった頃から物忘れが酷くなり、預金通帳や財布の置き場所までも忘れてしまい探し回ることも…。ただ症状はムラで、入院はとても嫌がったとか。ご長男も入院の無理強いは出来ず、１年ほどたった後に再度入院の相談に来られ、やっと入院が決まった経緯があったそうです。

ご入院後の当初は、かなり不安感も強く、「私のノートがない」「誰かに取られた」などの訴えが多く見られたものの、スタッフが「大丈夫よ。あとで一緒に探しましょうね」と声をかけていったんは収まるものの、またすぐそのような訴えをすることが多く見られました。また、芳江さんは幼稚園時代の話もスタッフを相手に繰り返し良くされていました。その頃の芳江さんは感情もムラで今のような落ち着きはみられなかったように思います。スタッフはそんな芳江さんに根気よく寄り添い、一緒に探し物をしたり、幼稚園時代の話には必ず「そうなんだ。それは凄いわね」と相槌を打ちます。そんな毎日の繰り返しでしたが、この頃から少しずつですが表情が和らぎ、スタッフ達とのやり取りでも穏やかな笑顔を見せるようになりました。また、周りの患者さんたちにも「どうしたの、大丈夫？」と声をかけたり、そこで聞いたことをスタッフに教えてくれたりもしています。先日、芳江さんに「私も幼稚園の先生になりたいな。なれるかなァ」というと「あなたのような人が先生だったら楽しいでしょうね」と否定はせず、笑って答えてくれました。

ご長男さん曰く「母は何事にも厳しく、頑固で、気難しいところがあるので、この病院に馴染めるかどうか心配していました。それがいつの頃からか『この病院が気に入ってるの』とか『職員さんは家族みたいだよ』というようになって…」。そんな芳江さんですが、何か困った事があると必ず一つのサインをだします。そのサインは手でおでこを擦るのです。私たちスタッフはそのサインを出来るだけ見逃さないようにしています。そして必ず声をかけるようにしています。そんな芳江さん。私たちスタッフは、これからも芳江さんの穏やかな笑顔が途絶えることのないように、寄り添っていきます。

３病棟　介護福祉士　松井　朋恵

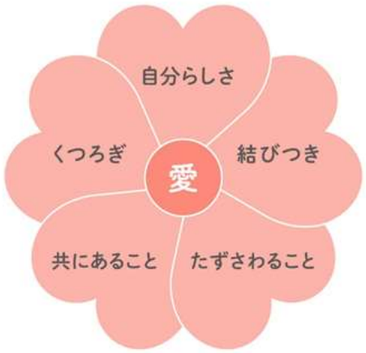
相談室 だより

医療福祉相談室　　江原　佳世子

弥生、３月を迎えました。待ち遠しかった春がもうそこまで来ていますね。

先日読んでいたパーソン・センタード・ケアの資料の中に、とある花の絵を見つけました。認知症をもつ人の心理的ニーズとして特に重要とされているものが表わされた絵です。

「一人の人として無条件に尊重されること＝愛」を中心として、「共にあること」「くつろぎ」「自分らしさ」「結びつき」「たずさわり」などの心理的な要素が５枚の花びらのように並んでいます。この５つの要素が満たされていくと、心理的に落ち着いたよい状態（well-being）になるそうです。これは認知症をもつ人だけでなく、全ての人に当てはまるものでもあると考えられます。



私はこの花の絵から、心を込めてたずさわること、心を寄せて共にあること、それが大切なのだなと感じました。

微力ではありますが、いつもそういう気持ちで患者さんやご家族の皆さんのお手伝いをしていけたらと思っています。